日本宗教学会 第 82 回学術大会

パネル発表要旨集

学術大会　　会期：2023 年 9 月 8 日(金)－10 日(日)　　会場：東京外国語大学　府中キャンパス

開催パネル一覧　　場所：研究講義棟　1 階

9 月 9 日（土）13：30～	パネル題目	代表者
第 1 部会	AI 実用化後の社会における宗教の学習と教育	石田　友梨
第 2 部会	現代世界における宗教哲学の可能性	氣多　雅子
第 3 部会	イスラームの聖者論と権威	澤井　　真
第 5 部会	コンスピリチュアリティ研究の課題と展望	栗田　英彦
第 6 部会	明治改暦 150 年に近代日本を問う	林　　淳
第 8 部会	人口減少地域における「宗教意識」の揺らぎ	木越　　康
第 10 部会	死者と暮らす－物質的宗教論からみる仏壇・家庭祭壇・手元供養－	村上　　晶

9 月 10 日（日）13：30～	パネル題目	代表者
第 1 部会	宗教現象学と認知進化科学の対話－理解の学と説明の学の架橋－	藤原　聖子
第 2 部会	宗教学における知の枠組みの再検討	澤井　義次
第 5 部会	Translation Matters: Translating Japanese Religious Concepts into Other Languages	OKUYAMA Michiaki
第 6 部会	『創価学会－政治宗教の成長と隘路』－現代宗教研究の課題－	猪瀬　優理
第 7 部会	日本における禅受容の再検討－中世から近世へ－	何　　燕生
第 8 部会	「新しい「領解文」(浄土真宗のみ教え)」について考える	深水　顕真
第 10 部会	葬儀のバーチャル化－課題と展望－	瓜生　大輔

パネル趣旨本文は、提出された原稿をそのまま掲載するのを原則としています。

AI 実用化後の社会における宗教の学習と教育

	代表者：石田　友梨
AI 時代における宗教リテラシー	井上　順孝（國學院大）
生成 AI 技術の仕組みと人文学への活用	大向　一輝（東大）
ChatGPT における宗教・思想的な「対話」と「呪文」	濱田　　陽（帝京大）
イスラームにおける AI の利活用	石田　友梨（岡山大）
比較宗教学の授業と AI 利用の問題点	木村　武史（筑波大）
	司会：石田　友梨（岡山大）

＜企画の要約と意義＞

本パネルでは、AI が実用化した現代社会において、信頼できる知識に基づきながら宗教をいかに学び、いかに教えるかについて、現状の分析や課題に基づき、多角的に議論する。インターネット上の情報については、基本的知識がなければ真偽の判断が難しい。宗教に関する言説について、これまで蓄積してきた研究成果に基づく知識をどのように学び、伝えていくかについては、本学会の会員の多くが直面している問題であると思われる。本パネルの意義は、喫緊の現代的課題を取り上げることで、情報を交換し、問題意識を共有し、論点の明確化と課題解決に向けた方策について検討する場を提供する点にある。

＜個々の発表内容＞

1. 井上順孝「AI 時代の宗教リテラシー」

AI 時代には宗教的な言説や行動指針などを発する主体が不明になる場合が出てくる。生成 AI がもたらす影響についての考察は宗教リテラシーを考える上で外せなくなる。カルト問題が起こるたびに宗教リテラシーが話題にのぼるが、何が宗教リテラシーなのかどのような手立てがあるかなどは明確でない。具体的な取り組みとしては宗教文化教育推進センターによるものがあるが、これもまだ試行錯誤の段階である。AI に集積されるデータを集めるのは誰か、生成 AI が限りなく作り出す宗教言説へのチェックはどのようになしうるかなどを含めて、宗教文化教育を推進する中で明らかになった問題点を踏まえて論じたい。

2. 大向一輝「生成 AI 技術の仕組みと人文学への活用」

近年公開が相次ぐ生成 AI モデルは、ユーザの要望に応じたテキストや画像を自動的に作成するサービスとして利用が拡大している。本発表では、生成 AI がどのような仕組みで実現されているのかを技術的な側面から概説し、現時点で可能であることと不可能であることを整理する。また、人文学と情報学の融合を目指すデジタルヒューマニティーズの教育に携わる立場から、人文学における AI の利活用について事例を紹介し、以降の発表の前提となる背景知識を提供する。

3. 濱田陽「ChatGPT における宗教・思想的な「対話」と「呪文」」

ChatGPT にあるフレーズを打ち込むことで、数学問題の解答率が飛躍的に高まることが論文で報告されると他の「呪文」探しが始まった。心理学の領域で人間に問うこと（対話）自体が脳神経科学で解明できない事象への有効な方法とされることに比し、AI への質問自体が方法として意味を持つとする発想も強まっている。では、宗教・思想的領域では、大規模言語モデルに、いかなる「問い」や「呪文」を選定、入力することで、宗教的・思想的内容が「深まる」可能性があり、また、そうした行為に、いかに向き合っていくことになるのか。透明性を担保し難くなった AI 倫理も含めて議論したい。

4. 石田友梨「イスラームにおける AI の利活用」

イスラームでは、宗教書のデジタル公開、チャットやメタバースを活用した宗教的サービスの提供が進められている。本発表では、近年 STEAM 教育で注目されるマレーシアの教育カリキュラムや、イスラームに基づく科学技術倫理 “Peopleware (Heartware)” の概念を例に、イスラームの教義と AI などの情報科学技術の両立について、目指される理想像と今日の実態について明らかにしたい。

5. 木村武史「比較宗教学の授業と AI 利用の問題点」

昨年度の発表では Spirit-Tech に焦点を当てたが、ChatGPT の公開は、宗教と技術の関係を変えた。高等教育の DX 化のもと宗教学の授業で生成 AI は利用すべきであろうか。ChatGPT に適切なプロンプトをするには、知識量と語彙力が求められる。同時に、「幻覚」の問題を含め、回答を批判的に検証する力を身につける教育も必要となる。学術書は批判的に読解するが、ChatGPT の回答の批判的読解とは何を意味しているのであろうか？　また、ChatGPT の回答の信頼性はどこに置くことができるのか。これらの問題について考察を加える。

現代世界における宗教哲学の可能性

代表者：氣多　雅子
信仰と宗教哲学－姉崎正治の場合－　古荘　匡義（龍大）
シモーヌ・ヴェイユにおける宗教哲学の可能性　脇坂　真弥（大谷大）
西谷啓治の宗教哲学がめざすもの　氣多　雅子（京大）
宗教哲学と自己変容的知の可能性　小林　　敬（花園大）
コメンテータ・司会：伊原木大祐（京大）

宗教哲学という語は現代ではさまざまな使われ方をしており、どういう学かということが極めてわかりにくくなっている。歴史的には、宗教哲学という学問的立場をはっきり打ち出したのはカントであり、近代ヨーロッパにおける宗教的状況と学問的展開を背景として、信仰の立場と哲学の立場との葛藤のなかで独自の哲学の領野として確立されてきた。日本の宗教哲学はそこに、日本の宗教的伝統を哲学的思索の土壌とするということを付け加えてきた。しかし、いま宗教哲学がわかりにくくなっているのは、現代世界の問題状況に宗教哲学がしっかり対峙していないからではないのか。そういう問題意識から、今日の宗教哲学はどのような役割を果たし得るのか、どのような可能性をもつのか、さまざまな角度から考察してみたい。

古荘は、日本の宗教学・宗教哲学の形成の初期段階における信仰をもつことと宗教哲学を営むこととの間の緊張関係を考えるために、姉崎正治を取り上げる。最初期に宗教哲学的と言える研究を行っていた姉崎は、科学的で体系的な宗教学の構築をめざし、その後の留学体験などを経て、自らの信念や日蓮信仰に基づきつつ、精緻な文献学をも踏まえた独特の思想を形成していった。本発表では、このような思想展開全体を宗教哲学的営みとして捉え直し、姉崎における信仰と宗教哲学の関係を考え、この関係から現代の宗教哲学の可能性を検討する。

脇坂は、シモーヌ・ヴェイユが「神について語らぬこと。他になしようがない時を除いて、この語を口に出さぬこと」と書いた時期が、葡萄畑で働きながら「主の祈り」を唱えるようになり、「脱創造」など、神について一見思弁的な概念を語り始める時期とほぼ重なっていることに注目する。この変化が哲学の放棄でも哲学から宗教へのショートカットでもないとしたら、このときヴェイユはいったい何をしていたのか。厳しい「知的誠実」を傷つけぬまま、ヴェイユに神について語らせたものは何だったのか。本発表では、ヴェイユのこうした変化を宗教哲学の可能性を考察する上でのひとつの鍵として見ることを試みる。

氣多は、日本の宗教哲学の一つの典型となる西谷啓治の思想を扱う。西谷は宗教哲学が根本的に抱える宗教と哲学との関係を歴史的変容のなかで追究し、宗教哲学は如何なる任務を負わされているかを見究めようとする。現代では宗教・神学の立場と文化・科学の立場とが対立する状況にあり、哲学は両者に批判的であることによって両者を媒介する役割を課せられている、これを果たすのが宗教哲学だと西谷は考える。本発表では、この西谷の考えが宗教哲学のあり方としてどこまで適切か、現在の状況においてこの役割はどこまで妥当か、考察する。

小林は、現代における宗教の私事化の傾向のなかにあって、宗教哲学が宗教のもつ超越性を解消してしまわない仕方で可能になるのは、いかなる場合であろうか、という問いのもとで、学としての宗教哲学の可能性と位置どりをフランス反省哲学の思索とその展開のうちに探っていく。とりわけ、反省哲学が要請する具体的展開としてのテクストの解釈という営みに着目し、聖典や古典に対する註解の営みにおいて、脱自的な自己変容を可能にするものとしての「知」のあり方を検討する。

伊原木は、以上 4 名の発表を受け、日本で営まれてきた宗教哲学にはどのような固有の特徴があるのか、また、そこにはどのような発展の可能性（ないし挫折の危険性）があるのか、という二つの問いを念頭に置きながらコメントする。さらに時間が許すかぎり、「宗教学」に対する「宗教哲学」というディシプリン上の位置づけに関しても論及する。その後、コメントに対するパネリストからの応答、およびフロアとのやりとりを通して、今日の宗教哲学に関する多面的な討議を実施する。

イスラームの聖者論と権威

代表者：澤井　　真
聖者が織り成す世界－霊的権威としてのイスラーム神秘主義－　澤井　　真（天理大）
メヴレヴィー教団と聖者　井上　貴恵（明大）
大統領は「聖者」か？－スーダンにおける宗教的権威の政治利用－　丸山　大介（防衛大学校）
コメンテータ：高橋　　圭（東洋大）
司会：澤井　　真（天理大）

イスラームでは、「聖者」（ワリー）と呼ばれる存在が広く信じられてきた。「ワリー」の語については、イスラームの聖典クルアーンにも登場するが、とりわけ「スーフィズム」と呼び表される神秘主義的コンテクストのなかで盛んに論じられてきた。イスラームの神秘主義者であるスーフィーたちは、その黎明期において、既存の学知であり宗教的権威でもあった法学や神学など学問的修養を積んできた学者たちに対して、神秘主義的な知を通して差異化を図ってきた。そこで、彼らは自らを「選良」と呼び表し、神の近くに存在する者としての聖者論を展開してきた。つまり、スーフィーらは自らの神秘主義的知をその根拠として、「もう一つ別の」権威として霊的権威を構築しようとしたのである。その後、オスマン朝期では政治的権威と結びつくとともに、民衆からの支持を獲得したことで、聖者という存在は一定の地位を確立した。

本パネルの目的は、イスラームにおける「聖者」に関する主張を多角的に分析することで、自らの立場や主張を正当化／正統化しようとしてきたかについて考察することにある。この点に関して、本パネルでは 3 人の登壇者がそれぞれの事例を提示する。

澤井真の「聖者が織り成す世界－霊的権威としてのイスラーム神秘主義－」は、イスラーム神秘主義の黎明期において、神秘主義者らが聖者としての立場を主張し、その権威性を獲得しようとした過程を分析するものである。まず、サッラージュ（988 年没）やクシャイリー（1072 年没）が編纂したスーフィーの語彙集や人物伝を検討し、神秘主義の立場を正当化する議論を確認する。そのうえで、聖者という存在を世界（宇宙）の秩序に位置づけることで、聖者の権威付けを試みたティルミズィー（869 年没）の思想について考察する。

井上貴恵の「メヴレヴィー教団と聖者」は、トルコを中心として発展したスーフィー教団であるメヴレヴィー教団とその教団に属した聖者らについて分析するものである。メヴレヴィー教団を実質的に創設し、運営したのはスルタン・ワラド（1312 年没）であるが、同教団の思想的基盤となっているのはスルタン・ワラドの父であるルーミー（1273 年没）である。ルーミー思想を権威づけていくことによって教団経営をより確実なものとしたスルタン・ワラドの手法を観察することで、スーフィー教団における聖者の位置付けについて明らかにする。

丸山大介の「大統領は「聖者」か？－スーダンにおける宗教的権威の政治利用－」は、2004 年に政府が主導して編纂した『［神の名を］朗誦する人々の事典』を題材に、時のバシール政権がスーフィズムの論理や術語を用いていかに自らの権威を正当化しようとしていたのかを明らかにすることを目的とする。同事典は、フンジュ王国（1604-1821）で活躍したスーフィーたちの経歴や逸話を集めた『聖者や信仰正しき者、学者、詩人に関する伝記』（1804/5 年頃に編纂）の延長線上に位置付けられる一方、大統領や大統領経験者、さらには政治家までもが著名なスーフィーと並んで立項されている点が特徴的である。本発表では、同事典の編纂意図や政治家の評伝内容を中心に、大統領や政治家がいかに自らを「聖者」に類する存在として宗教的に権威付けようとしていたのかを考察する。

3 つの発表を受けて、コメンテータである高橋圭が、前近代における聖者論や、近代以降の聖者をめぐる位置付けの変遷を踏まえながらコメントを行う。本パネルは、ある人物が聖者として権威性を帯びていく過程や、聖者という立場から主張を権威付けていく過程を明らかにすることを目指している。このことは、宗教における権威性の問題を、イスラームの聖者を事例に理論化することを試みる点で挑戦的なパネルであると言えよう。

コンスピリチュアリティ研究の課題と展望

代表者：栗田　英彦
コンスピリチュアリティの定義と批判、および有用性について　辻　隆太朗
太田竜のエコロジー運動にみるコンスピリチュアリティ　栗田　英彦（佛教大）
コロナ禍とコンスピリチュアリティ　堀江　宗正（東大）
米国ウェルネス・コミュニティにおけるコンスピリチュアリティ　伊藤　雅之（愛知学院大）
コメンテータ：ヤニス・ガイタニディス（千葉大）
司会：栗田　英彦（佛教大）

近年、社会現象としての陰謀論の前景化やジャーナリズム・マスメディアでの注目の増大に伴い、欧米の人文・社会科学で陰謀論研究が盛り上がりを見せ、国内でも研究が現れ始めている。こうしたなか、社会学者のシャーロット・ウォードとデイヴィッド・ヴォアスによって陰謀論とスピリチュアリティの交錯を意味するコンスピリチュアリティ概念が提案され、宗教研究者も加わって事例や概念の検討が行われている。日本でも論集『コンスピリチュアリティ入門』が刊行され、国内での議論の先鞭が付けられた。本パネルでは、コンスピリチュアリティに関する最新の事例や知見を持ち寄り、この研究領域の課題と展望について考察を試みる。

辻報告では、コンスピリチュアリティの定義とそれに対する批判を確認し、当概念の有用性を検討する。ウォードとヴォアスはコンスピリチュアリティを、悲観的・二元論的・右派的な陰謀論と、楽観的・一元論的・リベラルなスピリチュアリティが結び付いた、驚くべき新しい現象であると主張する。主な批判は、陰謀論とスピリチュアリティ双方の定義が恣意的であること、陰謀論とスピリチュアルなものとの結合自体は古くから存在し、新奇性は認められないということである。当概念の有用性として、陰謀論が正しさを訴える戦略としてスピリチュアルな語彙と世界認識を援用し、それが受け入れられやすさに寄与している可能性を探る。

栗田報告では、戦後日本におけるコンスピリチュアリティの顕著な事例である太田竜を取り上げ、エコロジー運動から陰謀論・陰謀史観――医薬産業・ユダヤ・レプティリアンに関する陰謀論――に至る思想的・理論的な推移を考察する。1980 年代の太田は、エコロジー政党（日本みどりの党・日本みどりの連合・地球維新党）の中心的人物として活動しながら、スピリチュアルな宗教思想とエコロジーを結び付けた先鋭的な思想を展開していた。その思想内容を詳細に分析し、太田の元シンパだった谷口明代（巌）やレプティリアン陰謀論者のデイヴィッド・アイクと対比しながら、太田が陰謀論に至る理路にはその宗教性と急進性が重要な役割を果たしたことを明らかにする。

堀江報告では、コロナ禍における陰謀論がどのようなものであり、スピリチュアリティとどのように結びついているのかをコロナ死生観調査のデータから明らかにする。結果として、スピリチュアリティ関与者と非関与者とでは、関与者の方がコロナ陰謀論に傾きやすいが、スピリチュアリティ関与者のなかではマイノリティであった。神道系の信仰、瞑想の実践、スピリチュアル本の読者の間ではコロナ陰謀論の支持が平均より高かった。それに対して、超越的存在への信念、占いや祈り・祈願の実践への関与者は、平均より陰謀論を支持していない。このことは、陰謀論とスピリチュアリティが互換可能であることを示すだろう。

伊藤報告では、コロナ・パンデミックのなかで顕著となった陰謀論とスピリチュアリティ文化の結びつきについて、おもに欧米のヨガをはじめとするウェルネス・コミュニティでの広がりに関して考察する。広がりの要因には、心身のホリスティックな健康を重視する人びとは強制的なワクチン接種への反発がきわめて大きいこと、また「すべてはつながっている」という陰謀論と類似した思考様式をもつことが挙げられる。しかし、陰謀論として扱われる多くの言説は科学的権威の象徴や慣用句を選択的に利用しており、非科学的とはかならずしも言えないため、社会病理としてではなく、代替的な物語として分析する必要のあることを指摘する。

最後にコメンテータのガイタニディスは、近年のカルト・スピリチュアリティ研究および国際的なエソテリシズム研究の動向を踏まえてコメントと質疑を行い、宗教研究・宗教社会学の幅広いコンテクストに議論を開く。

明治改暦 150 年に近代日本を問う

代表者：林　　淳
貞享改暦と明治改暦　林　　淳（愛知学院大）
明治改暦と近代の暦の機能－神社の例祭日の暦面への掲載から－　下村　育世（日本学術振興会）
明治改暦と近代仏教　岡田　正彦（天理大）
新暦の“超”宗教化、七曜表の“脱”宗教化　中牧　弘允（国立民博）
コメンテータ：遠藤　　潤（國學院大）
司会：林　　淳（愛知学院大）

明治 6（1873）年 1 月 1 日に長く通用されてきた太陰太陽暦は廃止され、太陽暦が採用されたことはよく知られている事実である。それは、明治政府による文明開化の政策の一環であり、これにより日本は欧米諸国と同一のグローバルな時間の世界に参入することになった。太陽暦は、官庁、軍隊、教育機関で率先して使われるようになる一方で、国民の生活の中では太陰太陽暦が「旧暦」として使われ続けた。太陽暦は、政府が上から押し付けたものであって、社会に生きる人々の生活を考慮した政策ではなかった。年中行事、生業の活動のなかでは旧暦が依然として継続した。政府が出した官暦とは別に、旧暦の暦注を満載した、政府の立場からして存在してはならない「おばけ暦」が広く社会に出回っていた。太陽暦が一般化したのは、第二次世界大戦後であるという見解はあるが、そのような見解をふまえれば、明治改暦を明治 6 年の一事件として理解して事足りることではない。明治改暦 150 年にあたる 2023 年こそ、暦を通して近代日本を問い直すのにふさわしい時と思われる。

林淳「貞享改暦と明治改暦」は、貞享改暦（1685 年）がいかに明治改暦への基盤を準備したのかを論じる。政府は、太陽暦採用にあたって旧暦を「妄誕無稽」なものとして全面的に廃止したにもかかわらず、旧暦は社会の中で広く使われ続けた。その理由としては、旧暦は農暦の性格をもち、さらに二十四節気を通して太陽暦の機能をすでにもっていたことが挙げられる。太陽暦的機能をもった旧暦は、明治改暦による太陽暦受容の基盤となるとともに、日本人が容易に旧暦を捨てなかった要因にもなった。

下村育世「明治改暦と近代の暦の機能－神社の例祭日の暦面への掲載から－」は、官暦の暦面を検討し、政府の意思をとらえようとする。明治改暦により、陰陽道に基づく日の吉凶は削除され、五節句の祝いも禁止される。そして暦面には皇紀紀元、元始祭など皇室にかかわる祝祭日、歴代天皇（神武から孝明天皇まで）の忌日、官幣社の例祭日などが新たに掲載され始めた。しかしこの神社の例祭日の記載は、当初は混乱があった。本発表では、政府内のやりとりに注目しながら、暦の「公告」機能に注目する。政府の意思決定を国民に伝達する「公告」機能は、近世の暦にはなかった近代の暦の特徴であろう。

岡田正彦「明治改暦と近代仏教」は、須弥山説をめぐる議論に焦点を置きながら、明治改暦が近代仏教に与えた影響をとりあげる。文化 7（1810）年、普門円通が『仏国暦象編』を刊行すると、円通に影響を受けた人々は独自の理論を展開し、仏暦を頒布したり、仏教各宗派で暦学を講義したりしながら天文学から占星術、医学の領域にまで及ぶ広範な活動を続けた。しかし、明治 6 年に太陽暦が採用されて編暦・造暦・頒暦の制度が根本的に改変されることになり、明治 9 年に教導職への須弥山説停止が通達されるなかで僧侶の知的素養としての梵暦・仏教天文学の役割は急速に減退していく。

中牧弘允「新暦の“超”宗教化、七曜表の“脱”宗教化」は、“超”宗教化と“脱”宗教化とが交差した近代日本のありようをとらえる。明治改暦は、文明史的には脱亜入欧の路線に沿ったものであった。とはいえ、それは一方では五節句を廃し天皇の祭祀を祝祭日に当てることで“超”宗教的な改変をめざし、他方ではユダヤ教の「安息日」やキリスト教の「主の日」にもとづく七曜の観念を“脱”宗教的に換骨奪胎する過程でもあった。“超”宗教的とは「神道は宗教に非ず」につながる論理であり、“脱”宗教的とは戦前の「月月火水木金金」や戦後の「休日出勤」にみられるような世俗的労働観に根ざすものである。

コメンテータは遠藤潤氏にお願いした。パネリストはそれぞれ宗教との関連を意識した発表を行う。近世・近代の神道史を専門とする遠藤氏からは、宗教史の立場点からのコメントを期待したい。

人口減少地域における「宗教意識」の揺らぎ

	代表者：木越　　康
宗教意識の揺らぎ	藤枝　　真（大谷大）
過疎地寺院に生きる人々の声	那須　公昭（龍大）
仏教信仰の動揺	木越　　康（大谷大）
“信仰の揺らぎ”の先にあるもの、基にあるもの	平子　泰弘
	司会：木越　　康（大谷大）

パネル代表者である木越は、共同研究のかたちで 2021 年度から 2023 年度にかけて科研「人口減少地域の宗教動態と仏教寺院の社会的役割に関する総合的研究」を進めてきた。本研究チームは、2017 年から大谷大学内「真宗総合研究所」で展開してきた「新しい時代における寺院のあり方研究」を発展させたものである。

日本全国に点在する仏教寺院は、教化を中心とした宗教活動の拠点として、門信徒の葬儀や法要の場として、さまざまな行事を通した地域住民の交流の場として、長きにわたって多様な形で地域コミュニティの形成・維持・発展に一定の役割を果してきた。しかし近年の全国的な少子高齢化と人口の都市部への集中によって地方の小規模市町村ではコミュニティの維持が困難となり、それに伴って寺院の置かれた状況や果たすべき役割も変化してきている。本研究は、このような事態にあって地域住民の宗教意識にどのような動揺や変容がみられるかを調査し、その上で、仏教をはじめとする伝統宗教の今後の役割や持続可能性について総合的に研究を行うこと目的としたものである。

このような関心に基づく調査は、歴史学や宗教学、社会学の分野で多くの先行研究があり、優れた成果もすでに多く示されるが、本研究チームでは特に人口減少が進む地域コミュニティやその周辺地域において「住民の身体に染み込んだ宗教感情」にどのような動揺や変化が起こっているのかを調査することを目的としたものである。したがって先行研究に多く見られる寺院に焦点をあてた研究ではなく、それに加え、住民・門信徒側に力点を置いた調査を積極的に展開してきた。当該研究を推進するためには多様な領域からの解析が必要となるため、当研究班は発足当初から宗教学・歴史学に加え、真宗学・地域社会学・地域福祉学・宗教人類学など、多分野の専門家との共同研究の体制を採ってきた。

2017 年にはじまった一連の研究活動は、2020 年度以降、世界的に拡大した新型コロナウイルス感染症の影響によって大きく制限されることとなった。特に調査対象となる高齢者が多く居住している地域への出向が困難となり、代替として郵送によるアンケート調査やＳＮＳを使用した聞き取りなど、研究の方法の工夫も余儀なくされた。しかし 2022 年度からは現地に赴いての聞き取り調査を再開させることが可能となり、解析を待つ資料も次第に集積されてきている。現在、真宗の伝統を強く持つ岐阜県揖斐郡揖斐川町を中心に調査を行っているが、地域、あるいは地域を離れた住民（他出子）の間にあるさまざまな宗教意識の動揺の様子が次第に浮き彫りになってきている。寺院側と住民側の間には「寺院の将来」に対する意識のズレなどもみられ、各寺院の置かれた厳しい状況の解決は容易ではない。

本パネルでは、「人口減少地域における宗教意識の揺らぎ」と題して、同調査からみえてきた内容を報告し、意見交換の場を開きたいと考える。研究班メンバーである藤枝真からは「宗教意識の揺らぎ」と題して、研究代表者である木越は「仏教信仰の動揺」と題して、地域住民の聞き取り調査にみられる信仰の動揺について紹介したい。また、当該研究チーム外からは、同分野において先行する２名の研究者を招いて報告を受ける。龍谷大学世界仏教文化研究センター客員研究員の那須公昭氏からは「過疎地寺院に生きる人々の声」と題して、曹洞宗桂昌寺住職の平子泰弘氏からは「“信仰の揺らぎ”の先にあるもの、基にあるもの」と題して報告を受け、会場の参加者と共に議論を交わしたい。コミュニティの解体とともに崩壊の危機に瀕する日本の伝統宗教・仏教信仰の現在を把握し、未来の姿を模索する貴重なパネルになることが期待される。

死者と暮らす－物質的宗教論からみる仏壇・家庭祭壇・手元供養－

代表者：村上　晶

仏壇を仏壇たらしめるモノ　村上　晶（駒大）

日本人正教徒の家庭祭壇を構成する人-モノ-住居空間　佐﨑　愛（東北大）

遺骨と暮らすこと－遺骨の物質性と手元供養－　宮澤　安紀（國學院大）

コメンテータ：ミア・ティッロネン（藤女子大）

司会：村上　晶（駒大）

本パネルは、物質的宗教論の観点から現代日本における弔いの実践について論じるものである。現在、国外では物質的宗教論（material religion）に関する多くの成果が発表されているが、日本においてその受容はまだ途上の段階である。しかし、宗教的実践が多くのモノを中心として展開していることは日本においても変わりはない。特に家庭内では仏壇をはじめとした死者に関わるモノや空間が日常風景の一部となっている。本パネルが事例とするのは、こうした家庭内にある弔いのモノの数々である。

これらのモノに注目することには、以下のような意義がある。まず、家庭内という日常空間に着目することによって、人々が死者や神仏という目に見えない存在と日々どのように関わっているのかを具体的に論じることができる。それは、制度宗教を中心とした従来の視点を脱して、日常実践から宗教を問い直そうという近年の宗教研究の動向にもつながる。また、物質的宗教論の議論を踏まえることで、死者とのかかわりをモノを取り巻いて展開する動態として捉えることができる。物質的宗教論は従来の宗教研究が精神／物質の二元論を前提として前者を重視してきたことへの反省に基づき、モノを精神の従属物として見ること、つまり、モノが背後にある思想や信仰の単なる反映であるという見方を越えていこうとするものである。それにより、宗教的な感覚や情動がモノや実践との関係のなかでどのように生じるのか、その生成的な側面に光が当たることになる。特に昨今変化が顕著であるとされる弔いの現状を論じる上では、モノを核として宗教を動態として捉える視点は有益だろう。以上の問題関心から、各発表ではそれぞれ仏壇、家庭祭壇、手元供養を事例とする。

まず、村上発表では津軽地方を事例として、仏壇内とその周囲にあるモノから仏壇という空間について再考する。仏壇と言えば通常、位牌や仏具といった直接祭祀に関わるモノを中心として考えられるが、本発表では仏壇内に置かれるそれら以外の、時に「私的な」モノ、また猫戸や経机に収納されている雑多なモノに特に注目し、モノの累積という観点から仏壇を捉える。そして、所有者の意図を離れたモノの存在が仏壇をはじめとする家内祭祀空間を成り立たせていることを論じる。

次の佐﨑発表では日本の正教会の家庭祭壇を事例とする。家庭祭壇とは、正教徒宅に設置することが望ましいとされる家庭内の信仰の場であるが、日本人正教徒はそこに死者を想いおこすモノを置くことで、死者への弔いも行う複合的な空間とする場合が多い。例えば、正教会の文脈を持つイコンや十字架、ろうそくなどがある一方で、位牌代わりの木製十字架や遺影、お茶などが置かれる。本発表では、宮城県を中心とする日本人正教徒宅の家庭祭壇を事例として、多様な家庭祭壇の在り方を、そこに置かれるモノが持つ文脈と共に、モノから意識される対象、エージェンシー、住居空間の観点から考察する。それによって、日本人正教徒宅の家庭祭壇で、いかに人-モノ-住居空間の相互作用が起こっているかを論じる。

続いて、宮澤発表では物質的宗教論を死生学（Death Studies）の成果と接続させながら現代の手元供養について論じる。死生学の領域では、人類学や宗教学におけるマテリアル・ターンにも影響を受けながら、2000 年代頃より物質文化に着目した研究が増加している。そのなかでは遺体、遺骨、遺灰など、死者の一部というモノへの関心も含まれ、それらを通じた生者と死者の関係性の再考が行われている。本発表では、こうした問題関心を背景に、遺骨を日常空間に持ち込む実践である日本の手元供養の興隆が何を意味するのか、現代日本における遺骨に対する人々の態度を検討することを通じて考えていく。

最後に、物質的宗教論の視点から宗教と観光について論じてきたミア・ティッロネンが物質的宗教論の研究動向を概観した上で各発表にコメントをする。

宗教現象学と認知進化科学の対話－理解の学と説明の学の架橋－

代表者：藤原　聖子
還元主義 VS 反還元主義論争からこぼれ落ちていたもの　藤原　聖子（東大）
ルドルフ・オットーにおける「感情」－CESR の議論と関連させて－　藁科　智恵（日大）
ペッタッツォーニの最高存在論－その意義と可能性－　江川　純一（明治学院大）
エリアーデのシンボル論と宗教現象学をめぐる問題　奥山　史亮（北海道科学大）
コメンテータ：石井　辰典（日本女子大）
司会：藤原　聖子（東大）

G・ファン・デル・レーウや M・エリアーデに代表される（広義の）宗教現象学は 1990 年代に入ると世界的に衰退し、それと入れ替わるように認知宗教学・宗教認知進化科学（Cognitive & Evolutionary Science of Religion、以下 CESR）が新たな通文化的理論として台頭した。一般には宗教現象学は反還元論に立つ「理解」の学、CESR は還元論に立つ「説明」の学として対置され、相容れないものとみなされてきた。だが、実際には宗教現象学者も「なぜ」を説明していたし、CESR も当事者の視点を組み込むこと抜きには理論を立てられない（人文学と科学を統合する知、コンシリエンスを唱えたのは進化生物学者エドワード・O・ウィルソンだった）。文理を合わせた総合知の必要性が唱えられる現在、宗教学において宗教現象学と CESR の対話を試みることは意義が高いはずだが、還元論・反還元論の対立のためかそのような前例は少ない。本パネルでは、宗教現象学史研究を専門とする共同研究グループが、非会員の認知科学者をコメンテータとして招くことにより、宗教現象学者の「なぜ」の問いは CESR によって取り組まれつくしているのか、CESR が扱う「何」は宗教現象学からみて網羅的なのかなどを議論する。代表者の藤原が研究の状況を概観し課題を指摘した後、第 2 発表者・藁科は R・オットー、第 3 発表者・江川は R・ペッタッツォーニ、第 4 発表者・奥山は M・エリアーデを取り上げ、3 人の宗教現象学者がそれぞれの研究の行程の中で「なぜ」の問いにどのようにして至ったか、3 人の宗教現象に対する見方は CESR に対してどのような問題を投げかけるかを論じる。

オットーは、宗教体験・感情の性質を特定しどのようにそれが発生するのかを説明した。CESR では宗教固有の性質を措定せずに日常的体験・感情をもとに説明するが、それによって「ヌミノーゼ」にはどう迫るのか。また、「Emotion」とは異なり知的作用を含むとオットーが言う「Gefühl」は、CESR から見れば何を指しているのか。

ペッタッツォーニの「最高存在」概念は A・ノレンザヤンの「ビッグ・ゴッド」概念に似ているが、なぜそのような存在が宗教史上に登場したのかの説明は全く異なり、またそれが歴史においてどう変化するかについての視点も異なる。「ビッグ・ゴッド」説では説明がつかない個別の最高存在のあり方をペッタッツォーニは示唆していなかっただろうか。

エリアーデの理論にとって象徴は中心的概念だが、CESR ではそうではない。説明概念としての原（元）型は CESR では否定されるが、象徴の普遍性や特定の文脈での現れを CESR が説明してこなかったのは不自然である。象徴を対象に入れないことで CESR にはどのような偏りが生じているか。CESR の説明体系では象徴とは何にあたり、それはどのような機能を持つのか。

さらに、宗教現象学者（の多く）に共通する方法論に注目すれば、いわゆる本質直観や形相直観とは心理学的にはどのような認識作用なのか。類型・パターン認識についてはどうか。

本質直観や感情移入を用いる古典的な宗教現象学の方法は主観的であると批判されたが、CESR も特に進化に関する内容については「just-so theory」（後付け説明）と言われやすく、必ずしも後者の方が強固なエビデンスに基づいているわけではない。宗教現象学を参照することにより CESR の特定の説がむしろ補強されるような可能性はないだろうか。

コメンテータの石井は宗教的信念の適応的機能を研究対象とする認知科学・心理学者である。欧米の CESR 研究者が、明確な無神論的立場をとる場合もとらない場合もユダヤ・キリスト教伝統の考え方をしばしば無意識のうちに踏襲しているのに対して、そのようなバックグランドをもたず、また還元論・反還元論論争からも自由な立場からコメントを得られることが期待できる。

宗教学における知の枠組みの再検討

	代表者：澤井　義次
イルファーンとイスラームの宗教構造	鎌田　　繁（東大）
西谷啓治の宗教哲学における宗教の再考	長岡　徹郎（阪大）
鈴木大拙の禅思想の展開	岩本　明美（鈴木大拙館）
シャンカラ派信仰の意味論的理解	澤井　義次（天理大）
	コメンテータ：木村　敏明（東北大）
	司会：澤井　義次（天理大）

現代の宗教学の概念的枠組みは、西欧近代の知の伝統で成立し展開してきたものである。この枠組みを非西欧の視点から捉えなおすと、その概念が内包する問題性を把握できるだろう。このパネル発表では、こうした認識をふまえて、従来の宗教学の枠組みを再検討する手がかりとして、イスラーム思想やインド思想さらに日本の禅思想や宗教思想の特徴を掘り下げて考察し、宗教学における新たな知の枠組みを模索したい。このパネルでは、鎌田繁、長岡徹郎、岩本明美、澤井義次の順で研究発表をおこなう。

まず、鎌田はイスラームがシャリーアに基礎をおく法学的構造を強くもつ宗教であるが、その歴史的展開のなかでイルファーンと呼ばれるイスラーム神秘思想の潮流を生み出したことを明らかにする。イルファーンはイスラーム共同体のなかで一部のエリート知識人の営為として尊重されたり、また異端的な教説として排斥されたり、毀誉褒貶さまざまである。イスラームを研究者のように他者の目で見る場合も、どのような思想潮流を中心に置いて見るかによってイスラームのイメージは相違してくる。パネルでは、イスラームの宗教構造の全体を視野に置きながら、そのなかでイルファーンが占める位置を考察する。

次に長岡は、まず、西田幾多郎が『善の研究』（1911）において、東洋思想と西洋思想との邂逅から生まれた「純粋経験」の立場、つまりは西洋近代の知とは異なる枠組みから、宗教を説明しようとしたことを論じ、そのうえで、西谷啓治がその西田が切り開いた新たな宗教哲学的立場を、ニヒリズムという歴史的境位から継承・発展させたことを明らかにする。西谷は主著『宗教とは何か』（1961）において、ニヒリズムによって宗教が懐疑にふされた状況を逆手にとり、宗教が起こってくる「もと」を「実在の自覚」という方法で探求するという「ニヒリズムによるニヒリズムの超克」を目指すなかで、「空の立場」を構想する。このように西谷の「空の立場」には、宗教哲学が孕む現代的な諸問題が畳み込まれている。このような西谷の宗教への根本的な問い直しが、現代の宗教学における知の枠組みを再検討するうえで、いかに寄与するのかを考察する。

さらに岩本は、鈴木大拙が 1959 年に上梓した *Zen and Japanese Culture*／『禅と日本文化』を取り上げ、鈴木大拙の禅思想について考察する。『禅と日本文化』は、1938 年出版の *Zen Buddhism and Its Influence on Japanese Culture* の増補改訂版であり、第一章はすっかり書き換えられ、章題も「禅の予備知識」から「禅とは何か」に改められている。また「禅と剣道」の章の著しい増加、「禅と俳句」など新しいテーマの章の付加など、改訂版において大拙の思想は大いに発展している。その発展を具体的にあとづけることによって大拙の禅思想を明らかにし、ひいては思想を開陳する大拙独自の手法などについて検討する。

最後に澤井は、現代の宗教学における概念的枠組みの再検討へ向けて、インド宗教のなかでも、特にシャンカラ派信仰を意味論的に考察する。シャンカラ派の思想は、最高原理ブラフマンの二重性、すなわち無属性ブラフマンと有属性ブラフマンを説き、有属性ブラフマンに対する無属性ブラフマンの優位性を強調してきた。ところが、ブラフマンの二重性とその特徴をその具体的信仰のコンテクストのなかで捉えなおすと、人々の宗教的コミットメントには価値的な差異性はほとんど見られない。宗教思想と具体的信仰のあいだには、ずれが存在するが、こうした事実が内包する宗教的意味を意味論的視座から探究する。

以上、4 名の研究発表を承けて、コメンテータの木村敏明が、各発表内容についてコメントをおこなう。各発表者がそのコメントに応答した後、全てのパネル参加者とともに全体討議をおこなう。

国際委員会企画パネル

Translation Matters: Translating Japanese Religious Concepts into Other Languages

	Convener：OKUYAMA Michiaki	
Waka in Religious Contexts: Issues in Translation	Molly VALLOR	（Meiji Gakuin Univ.）
The Philosophical Dimensions of Translating and the *Shugendō* Case	Andrea CASTIGLIONI	（Nagoya City Univ.）
Tourism and Translating Japanese Religions	Mia TILLONEN	（Fuji Women's Univ.）
Translating the “Kokoro” in Spiritual Care	Timothy O. BENEDICT	（Kwansei Gakuin Univ.）
	Commentator：Cynthea BOGEL	
	Chair：OKUYAMA Michiaki	（Toyo Eiwa Univ.）

Scholars and students abroad interested in Japanese religions may naturally begin their investigations by translations of primary sources in their own language(s) or secondary sources on subject. Later, however, they may endeavor to learn Japanese so they can directly read Japanese texts—whether in modern or classical Japanese—or even Chinese. As their interest deepens, and they begin specializing in a subject related to Japanese religions, the researcher may notice that they face linguistic challenges. This is because there are copious Japanese materials not yet translated into other languages, and among those that are, they may well be outdated. The student might wonder how they should go about translating those works into their own language.

This panel proposes to be a forum where international members of the Japanese Association for Religious Studies and some guest speakers can share their experiences from their academic career, with a special focus on matters related to translation. Our panelists of varying expertises—from classical and subjects of *waka* and *Shugendō* to contemporary issues of tourism and spiritual care—are invited to share their own ideas and insights on translation from Japanese into English or other languages. They will refer to any or all of the following in relation to conceptual, practical or technical issues in translation:

1) How they learned to translate Japanese in a scholarly way into another language? What are their tips, recommendations, and cautionary tales?

2) What the biggest challenge they faced—and hopefully overcame—in their own translation project?

3) What has been the most successful achievement in their own translation project, whether on the level of a word, concept, idea, phrase and paragraph—or the level of a scholarly article or book?

Our panelists are also encouraged to add, where possible, more theoretical or philosophical issues on the subject of translation. Dr. Cynthea Bogel joins this panel as the commentator. Cynthea is a scholar of Buddhist visual culture in Asia and Japanese art history and someone who has accumulated experiences related to translation as the founding and chief editor for *Journal of Asian Humanities at Kyushu University* (2016–2022), and through her own research and writing.

Finally, the panel can present an opportunity wherein panelists and attendees can freely discuss any relevant issue(s) with regard to translation, especially within Japanese religions and its related fields. Abstracts of each presentation follow.

Molly Vallor, “*Waka* in Religious Contexts: Issues in Translation”

This presentation will discuss *waka* in religious contexts and their translation. *Waka* in such contexts a wide variety of poems, including verses contained in the imperial anthologies, votive sequences offered at shrines and temples, didactic verses by monks and nuns, poems attributed to *kami* and buddhas/bodhisattvas, as well as spell poems (*majinai uta* or *juka)*. Following a brief overview of the genre, I will consider some of the specific conceptual, linguistic, and textual challenges to translation. Finally, I will examine the existing body of English translations in order to propose new possibilities for future translations.

Andrea Castiglioni, “The Philosophical Dimensions of Translating and the *Shugendō* Case”

This talk focuses on the philosophical implications linked with the concept of translation starting from the famous Walter Benjamin’s book, *The Task of the Translator,* published in 1921. After analyzing Benjamin’s interpretation of translation as an unescapable metamorphosis of the original text I discuss the notion of “afterlife” (Ger. *fortleben*) in connection with the heteroglossic amplifications that occur when religious works are translated and transmitted to other cultures via different languages. In the conclusive part I take into consideration some new perspectives on possible renderings of the term Shugendō in English translation.

Mia Tillonen, “Tourism and Translating Japanese Religions”

Religious tourism involves not only the translation of texts from one language to another, but also cultural interaction, in which translators serve as mediators by providing visitors with an understanding of religious places, practices, and objects. The researcher of religious tourism further analyzes and translates these experiences to produce academic texts. Therefore, translation is an essential part of both religious tourism and its study. In this presentation, I will explore different types of translation and discuss various strategies such as domestication and foreignization, and their application in translating religious objects and practices in the context of tourism.

Timothy O. Benedict, “Translating the ‘Kokoro’ in Spiritual Care”

The *kokoro*, a word that signifies the heart, the mind, the will, and much more, is notoriously difficult to translate into a single English word. While the heart and mind are often considered separately in English, one representing the seat of emotions and the other the seat of cognition, in the *kokoro* this distinction is blurred. This presentation focuses on the challenges of distinguishing between care for the “kokoro” and “spirituality” of hospice patients at the end of life. It also discusses how problems in translating the “kokoro” can help us better understand the affective dimensions of Japanese religious identity more broadly.

『創価学会－政治宗教の成長と隘路』－現代宗教研究の課題－

代表者：猪瀬　優理
創価学会研究の構想と日本における〈政治－宗教〉の関係　櫻井　義秀（北大）
創価学会の二つの原理をめぐる問いかけ　粟津　賢太（上智大）
創価学会の組織を成り立たせるもの　猪瀬　優理（龍大）
コメンテータ：中野　　毅（創価大）
司会：櫻井　義秀（北大）

本パネルは、櫻井義秀・猪瀬優理編『創価学会－政治宗教の成長と隘路』法藏館、2023 年 4 月刊行の書評セッションであるが、同時に、日本の新宗教を含む現代宗教研究の課題を、創価学会研究をもとに描出できないかと考えている。

2022 年は、7 月 8 日の安倍晋三元首相の殺害事件に端を発した統一教会問題で日本社会は揺れた。その際、旧統一教会（現、世界平和統一家庭連合）の固有の問題に加えて、政治と宗教のあり方をめぐっても議論が展開された。それは、自民党と旧統一教会および関連団体との接点や関係だけにとどまらず、宗教団体が政治参加を行ない、政策に影響力を及ぼすことの是非についても論議された。そうなれば、創価学会＝公明党も政権与党に加わる政治参加のかたちにおいて議論の俎上に遠からず載せられることになろう。

本パネルに参加する櫻井・猪瀬・粟津の 3 名は、この度のような事件や社会的議論を全く予期することなく、創価学会＝公明党の政治宗教としてのあり方を現代宗教研究の課題として数年来取り組んできた。

私たちは、政治宗教という耳慣れない言葉を創価学会という教団の特徴を示す分析概念として使っている。戦前の創価教育学会や戦後の創価学会は設立当初から政治参加を企図していたわけではないが、公明政治連盟が結成されてから現在に到る 60 年の歴史において、創価学会は政治に直接参加するための組織体制や運動形態に転換してきた。教説や信仰のあり方においても信者を政治参加に強力に動員する宗教の類型として、特定の政治家や政党を間接的に支援・後援する他教団とは性格を異にしている。

この書籍では、創価学会の設立と教団成長・発展の経緯を歴史的にたどりながら、指導者や初期信者たちに抱かれた「勝利への渇望」という集合的記憶、選挙活動に活かされる信仰のあり方とジェンダー化される信仰と組織編成、創価学会信者が抱く平和と福祉の理念が政権与党となった公明党の現実路線によって揺らぐ状況、成長・成功神話に固執するがゆえの隘路を日本社会の将来展望と合わせながらみていく。

第一発表者で司会も兼ねる櫻井は、「創価学会研究の構想と日本における〈政治－宗教〉の関係」というタイトルで、書籍の概要を述べると共に、現代日本において〈政治－宗教〉の関係をめぐる論議の位相がどのようなものであるかを説明した上で、本書の投げかけた論点をまとめる。

第二発表者である粟津は、「創価学会の二つの原理をめぐる問いかけ」というタイトルで、平和や福祉の理念を掲げる創価学会と現実の政党支援との相克を、創価学会の持つ二つの原理として考察を行う。この原理の由来と、これが創価学会にとって本質的なものであるのかについて議論する。

第三発表者である猪瀬は、「創価学会の組織を成り立たせるもの」というタイトルで、担当章に置いて取り上げた創価学会員にとっての選挙活動の持つ意味と、「家族」イメージの政治性が創価学会の組織を成り立たせる構成要素として持つ意味について改めて確認する。

以上の発表に対して、『戦後日本の宗教と政治』をはじめとした継続した研究において、国家・政治と宗教の関係について深く考察し、創価学会の社会的位置づけについても検討してきた中野毅氏をコメンテータに迎え、教団研究と創価学会の立場も踏まえた現代宗教研究の観点からの批判を頂く。

これらを踏まえてフロアと日本の新宗教を含む現代宗教研究の課題に関する建設的な議論を行う。

日本における禅受容の再検討－中世から近世へ－

代表者：何　　燕生
『弁道話』から読み取れるもの－初期道元の課題－　何　　燕生（郡山女子大）
円爾の禅密諸典籍の利用と鎌倉中期の禅の展開　和田有希子（早大）
「密参禅」の由来と展開の再検討－下語の使用を手がかりに－　ディディエ・ダヴァン（国文学研究資料館）
看話禅の展開－大慧宗杲と白隠慧鶴を中心として－　柳　　幹康（東大）
コメンテータ：末木文美士（国際日文研）
司会：何　　燕生（郡山女子大）

本パネルは、中世・近世の日本における禅の受容に焦点を当て、その再検討を行う。参加者は共同研究「『語りえぬもの』を語る行為とその思想表現に関する学際的研究－禅の言葉と翻訳を中心課題として－」（代表・何燕生、京都大学人文科学研究所、2022～2024 年度）のメンバーより成る。

禅は夙に奈良・平安時代から日本に伝えられてきたが、本格的な受容が始まるのは鎌倉時代である。当時の代表的な禅僧に栄西や道元・円爾らがいる。日本における禅宗の展開は、天台や華厳・真言など既存の仏教と無関係ではいられず、なかには「密教的」だと言われるものもある。のち室町時代には所謂「密参禅」が起こり、江戸時代には白隠慧鶴による新たな展開―宋代の大慧宗杲の看話禅を承けつつ、「隻手音声」という新たな公案（禅の課題）を創出するという変化―も見られる。本パネルでは、これらの変化・変容に着目し、中近世の日本における禅の展開の諸相を明らかにすることを目指す。発表者 4 名の報告内容は以下の通り。

(1) 何燕生は道元（1200-1253）の『弁道話』に着目する。本書は道元が宋から帰国した後、和文で著わした最初の作品である。いわゆる七十五巻本『正法眼蔵』には収録されていないが、宗門では古来、「弁」（弁道話）「現」（現成公案）「仏」（仏性）といわれ、永平寺本山版においても「第一」とされるように、道元の考えを伝える重要な書物の一つとされてきた。しかしながら、その内容は禅に留まらず、中古天台や華厳・真言・唐代禅・宋代禅、および栄西の禅など多岐に及び、かつ、道元に特有の用語が数多く見えている。以上の『弁道話』における諸問題について再検討する。

(2) 和田有希子は円爾（1202-1280）における禅密の典籍の問題について分析する。中世の禅の展開史において、ある禅の特色が「密教的」とされることがしばしばある。だが「密教的」の定義には揺れがある。「密教的」とは何か。「密教的」な禅は禅ではないのか。では禅とは何であったのか。そのような疑問のもと、鎌倉中期の京都東福寺の開山、円爾による『宗鏡録』『円悟心要』等の禅籍、『釈摩訶衍論』を含めた密教典籍やその他諸典籍の利用の仕方に対する考察を中心に、鎌倉中期の禅の内実に迫る。

(3) ディディエ・ダヴァンは「密参禅」の由来と展開について再検討を加える。臨済・曹洞の別を問わず、近世前半の日本禅のほぼ全ては所謂「密参禅」であったにも関わらず、長年その禅は酷評され、ながらく研究の対象とされてこなかったと言える。しかし、その由来と発展の過程を検討せずには日本禅の歴史の全体図を描けない。ダヴァンは、飯塚大展や安藤嘉則の研究成果を踏まえ、大燈国師こと宗峰妙超（1283-1338）に密参禅の起源を求めうるという仮説を立てるとともに、下語（公案に対するコメント）の各種用例の分析を通じて、密参禅が大徳寺派から臨済・曹洞両宗へ広まった過程を再考する。

(4) 柳幹康は大慧宗杲（1089-1163）と白隠慧鶴（1686-1769）を中心に、中国から日本にかけての看話禅の展開を分析する。従来の大方の見方によれば看話禅（公案に全意識を集中して開悟にいたる手法）は、大慧による大成の後、ほとんど形を変えることなく白隠の賦活を経て今日まで実践されてきたとされる。だが近年、かかる図式の見直しが進み、その歴史的変遷の様子が明らかになりつつある。そこでそれらの成果を踏まえ、看話禅を考えるうえで重要な大慧・白隠のふたりを中心に、その変遷について素描する。

以上、4 名の研究発表に対して、斯界で最新の研究成果『禅の中世』（臨川書店、2022 年）を刊行した末木文美士がコメンテータを務め、各パネリストの応答、および参加者を交えての討論を通じ、理解を深める。

なお、パネルの趣旨説明と総括は何が行う予定である。

「新しい「領解文」（浄土真宗のみ教え）」について考える

代表者：深水　顕真

『領解文』が説示する「安心」と『新しい領解文』の領解　稲城　蓮恵
教典翻訳の危険性－「わかりやすさ」という誘惑－　深水　顕真（広島文教大）
宗教の社会的実践に関する浄土真宗の基本的立場　藤丸　智雄（武蔵野大）
新領解文の評価基準の考察－「黄金のチェイン」との比較－　ケネス田中（武蔵野大）

司会：深水　顕真（広島文教大）

2023 年 1 月 16 日、専如門主から「新しい「領解文」（浄土真宗のみ教え）についての消息」が発布された。「消息」とは門主が発する公式の声明である。この消息では蓮如に由来する『領解文』を現代の布教伝道にあったものに置き換える旨が述べられ、「新しい「領解文」（浄土真宗のみ教え）」（以下新領解文）が提示された。この新領解文は、従来の古語による『領解文』の現代語訳ではなく、新作の 19 行にわたる現代語の韻文で表現されている。

この消息の発布以降、浄土真宗本願寺派の教団内においては、その内容や成立過程について様々な疑義や反対意見が呈されている。特に、3 月 26 日には本願寺派における学僧の最高位である勧学と司教 18 名が共同で、「宗祖親鸞聖人のご法義に照らして速やかに取り下げるべきである。」との声明文をインターネット上で公開した。門主の消息に対してこのような反論がなされることは異例である。

本パネルは、この新領解文を基軸に、仏教学や浄土真宗教学、社会学など異なる立場から、その文脈を広範囲に議論するものである。全く違う専門領域を持つ登壇者が、一つの出来事をどのように分析するか、その方法論においても興味深いとパネルと考える。

稲城蓮恵：『領解文』が説示する「安心」と『新しい領解文』の領解

蓮如作という『領解文』は、正しい領解（安心）を判断する「安心の鑑」として現代に至るまで、僧侶門信徒から敬重され、多くの寺院や家庭で、仏事ごとに口述してきた大切な聖教である。特に、「もろもろの雑行雑修…」という安心段は、自力を捨てて他力に帰するという浄土真宗の安心を説く。これは親鸞の説く「信心」をどのように承けているのであろうか。また、蓮如教学が構築された背景と、今発表でテーマとする『新しい領解文』は浄土真宗本願寺派が発布した消息であるが、発布に至る経緯について触れてみたい。

深水顕真：教典翻訳の危険性－「わかりやすさ」という誘惑－

専如門主はこの消息において、古語による『領解文』の平易さが希薄となったため、「わかりやすい」現代語での新領解文を発布したとしている。しかし、現代語への置き換えが本当に「わかりやすさ」となるのだろうか。単語レベルでの「わかりやすさ」によって本来の宗教性が毀損されているのではないかと指摘したい。

藤丸智雄：宗教の社会的実践に関する浄土真宗の基本的立場

浄土真宗の社会性・公共性は、永遠のテーマと言っても良い。編者を務めた『本願寺白熱教室』では「公共性」について「他者によって承認され、肯定された生を生き抜くことができることを最重要の原理とする社会のあり方」と定義した上で、僧侶・寺院の公共性について小林正弥先生をはじめ多くの識者・僧侶が検討を加えて一冊を構成した。本書を作成する上で留意した点は、浄土真宗は念仏の「教え」を大切にする宗教であり、教えが公共性を駆動するのか、参照されるものかという点であり、この論点は「新しい領解文」においても有効な視座となりうると考える。

ケネス田中：新領解文の評価基準の考察－「黄金のチェイン」との比較－

新領解文の目的は、真実信心を正しく、分かりやすく伝えることであり、そのためには、「時代状況が人々の意識に応じた伝道方法を工夫し、伝わるものにしていかなければなりません」と宣言されている。この目的は、アメリカの浄土真宗教団では、「黄金のチェイン」によって果たされているといえる。それは、現代社会の「世俗化」、「理性化」、「個人化」、及び「社会性」という時代状況の変化のニーズに応えた領解文のような役割を果たしているからである。

葬儀のバーチャル化－課題と展望－

代表者：瓜生　大輔
遠隔葬儀参列の現状－コロナ禍を経た今後の展望－　瓜生　大輔（芝浦工業大）
葬儀参列形態からみるバーチャル化の可能性－韓国調査報告－　金セッピョル（総合地球環境学研究所）
わが家の葬儀の遺し方－中国の葬儀ビデオが照り返す弔いの形－　丹羽　朋子（国際ファッション専門職大）
VR で再現された故人との再会－日韓の TV 番組を事例に－　高木　良子（東京工業大）
コメンテータ：田中　大介（自治医科大）
司会：瓜生　大輔（芝浦工業大）

葬儀のネット中継をはじめとする「葬儀のバーチャル化」について、現時点での考察と将来的な展望を示す。世界的パンデミックを契機に、複数の事業者が遠隔葬儀参列サービスの提供を開始した一方で、すでにサービスを打ち切った事業者も少なくない。これらの試行錯誤にはどのような意図や背景があり、また困難があったのか。本パネルでは、一連の現象が今後の葬儀のあり方にどのような示唆を与えるのかを検討する。

各発表では遠隔葬儀サービス提供事業者の現状、葬儀解釈の文化差、葬儀の撮影、死者を「再現」する技術など、今後の葬儀のバーチャル化を検討する上で参考となる視点を提供する。さらに、現代葬儀産業研究に携わるコメンテータを迎え、技術、デザイン、文化、産業など、様々な視座から近未来の葬儀のあり方を議論する。以下に、個々の発表内容とコメンテータの概略を記す。

瓜生 大輔「遠隔葬儀参列の現状－コロナ禍を経た今後の展望－」
葬儀の簡略化や「バーチャル参列」を余儀なくされたコロナ禍を経て、葬儀事業者や参列者は何を学んだのか。ネット中継サービスは一過性のものだったのか。本発表では、発表者自身が 2020 年に経験した遠隔葬儀参列支援事例、遠隔葬儀参列サービスを提供する事業者の声をもとに、今後の（遠隔）葬儀参列のあり方を検討する。急速に進む超高齢化社会において、また家族葬、密葬、直葬が一般化した今日を経て、葬儀はどこに向かうのか。ひとつの方向性を提示する。

金 セッピョル「葬儀参列形態からみるバーチャル化の可能性－韓国調査報告－」
2022 年に行った韓国の葬儀社視察の報告を中心に、日韓の葬儀参列形態を比較し、葬儀のバーチャル化の可能性や課題を検討する。現在の日韓の葬儀を比較すると、参列者の範囲や人数、参列への意味づけ、参列のタイミングや参列時の行動に顕著な差が見られる。そして、それらが葬儀のバーチャル化に対する認識・解釈の違いに影響していると考えられる。本発表では葬儀のバーチャル化に関する日韓の受容差異の理解が「現代の葬儀における重要な特質とは何か」という問いの追求につながる可能性を提起する。

丹羽 朋子「わが家の葬儀の遺し方－中国の葬儀ビデオが照り返す弔いの形－」
2010 年前後に中国陝西省で製作されていた私的な「葬儀ビデオ」を事例に、葬礼を動画記録し、時空間を超えて共有する経験について考察する。発表者は当時、現地の写真館で撮影助手としてそれらの製作に携わり、カメラマンや依頼主である遺族から現地の「撮り方」の型の模倣を指示された。彼らの「カメラの眼」が葬礼のどの部分をどのように記録しようとするかは、「孝」の実践ほか、彼らにとっての葬礼の意味を如実に映し出す。その一方で、霊的存在との交渉などカメラには写らないが現場で重視される儀礼的行為もある。葬儀ビデオの撮影・編集作業の考察から、当地のコスモロジーに根ざす葬礼がもつ多重的意味について考えたい。

高木 良子「VR で再現された故人との再会－日韓の TV 番組を事例に－」
最新テクノロジーを用いた死者の表象のありかたについて検討する。事例として、NHK の番組「AI でよみがえる美空ひばり」、「復活の日～もしも死んだ人と会えるなら～」、韓国のテレビ番組「あなたに会った」を取り上げる。各番組の制作者および韓国の遺族に対して行ったインタビューを通じ、遺族がどのように VR（バーチャル・リアリティー）を用いた死者の表象を認知したのかを明らかにする。

田中 大介（コメンテータ）
著書『葬儀業のエスノグラフィ』（東京大学出版会）では、文化人類学者として葬儀社・関連業者で現場作業に従事しながら得た経験をもとに超高齢化社会における「現代の死」を問う。本パネルではコメンテータとして各発表への解説を寄せるとともに、発表者、参加者とともに近未来の葬儀について議論を展開する。

※本パネルは JSPS 科研費 22K18447 による研究活動の一環として開催する。

2023 年 7 月 3 日発行
編集・発行　日本宗教学会　第 82 回学術大会実行委員会
HP：https://jpars.org/conference/